HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	討議 ： パネルディスカッション
Description	北海道大学入試改革フォーラム2017. 2017年5月22日. 北海道大学学術交流会館(札幌). 北海道大学アドミッションセンター主催, 北海道大学高等教育推進機構 高等教育研究部 高等教育研究部門共催
Issue Date	2017
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/86327
Type	other
File Information	5_Discussion.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

討　　議
－パネルディスカッション－

（司会）

お待たせいたしました。それでは第３部の総括討論に入ります。第３部では、基調講演および現状報告いただきました４名の先生方をパネリストにお迎えして、先ほど皆様方からお寄せいただいたご質問等を適宜紹介しながら、総括的な討論を進めてまいります。コーディネーターは北海道大学アドミッションセンター、藤田修副センター長と、北海道大学高等教育推進機構の鈴木誠教授のお二方です。ではお二方、どうぞよろしくお願いします。

（鈴木）

皆様、今日はお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。ただ今から第３部のパネルディスカッション、総括討論に移りたいと思います。今日、一コーディネーターになっております、北海道大学の鈴木誠と申します。よろしくお願いします。

（藤田）

アドミッションセンター、副センター長の藤田です。専門は工学系の者でございます。よろしくお願いします。

（鈴木）

進行の仕方についてお話しします。皆様から質問票を今いただきました。全部で30枚ぐらい来ております。これに従って、時間の許す限り順次パネリストに答えていただきながら、あるいは場合によっては我々から４名に質問を投げ掛けながら、45分まで進めてまいりたいと思います。どうかご協力よろしくお願いいたします。それでは、まず藤田先生から。

（藤田）

それではまず、大塚先生に届いている質問を１つご紹介いたします。実施方針案にのっとった大学入学共通テスト、平成33年度入試を実施した場合、混乱なく完遂できる可能性はどの程度だと思いますか。また、その混乱の例として、期日まで大学に成績が提供できない、記述問題に採点ミスがある等、いろいろあると思いますが、そのあたりいかがでしょうかというご質問です。

（大塚）

ありがとうございます。これは私の立場では答えにくい質問ですけれど、私の立場を抜きにすれば、非常に難しいだろうと個人的には思っており

ます。これは、言ってはいけないのかもしれませんが（笑）。たぶんご指摘の点は、これからプレテストやシミュレーションなど、いろいろ検証していくことになると思います。

記述式の採点ミスについてですが、民間業者に委託して、採点者を集めて、短期間で採点を仕上げるという構図は、我々はガレー船という、奴隷がみんなでこぐ船がありますが、そんなイメージを連想させると言っておりまして、短期間で完了しなければなりませんから、そんな感じでとにかく採点をさせて間に合わせることになるんだろうと想像に難くありません。その採点結果を民間業者から受け取るときは、いわゆる「検収」をしなければならないでしょう。では、「検収」はどういう形でやるか。これはおそらくサンプリング調査のような形で行うことになるのだろうと思いますが、どんな形であるにせよ、何らかの形でセンターでも確認作業を入れていかなければいけないだろうという話は出ております。その「検収」において、ミスが発見されることはもちろんあり得ることで、そのときにまた全部採点をやり直すなどということでは、とても成績提供期日に間に合わなくなります。そういう危険性はかなりあるだろうと思います。

ただ、センター試験も30年以上にわたって、四半世紀にわたって、何かあるかもしれないといつも心配しながらも、大きなトラブルなく来られているので、何回かは何事もなく過ぎる可能性もあるかもしれませんが、そうであったとしても、この点に関しては十分リスクマネジメントを考えていかなければいけないであろうと思っております。

（藤田）

それに関してもう１段突っ込んだ質問がございます。例えば採点者の確保や出題者の確保、そういった問題もいろいろ難しさを含んでおりますし、これからフィージビリティースタディーを行われると。その中でいろいろな難しさが出てきた場合に、記述式問題の導入を断念する可能性はありますかというご質問なのですが、いかがでございましょうか。

（大塚）

これも私の立場からは答えられない質問です。私の話のなかで何度かパブコメをやっていますなどと申しましたのは、実施方針を変えていくというためには、何かそういう外圧が必要かと思ってのことです。こんなことも言ってはいけないことかもしれませんが（笑）。とにかく、ドン・キホーテではありませんが、精算なく突入していくことになるのではということを心配しております。ただ、私の立場からは、どういう状況になったらどう対応するといったことが、どういうところでどう決まっていくのか分かりませんので、それ以上のことはお答えできません。

（藤田）

難しい質問にもお答えいただいてありがとうございます。続いて小林様へのご質問です。これは大学でどういう人材を輩出するかということに関連することだと思いますけれども、トヨタではグローバル人材採用のためにどのような入社選抜をされているか教えていただきたい。それから入社後、グローバル人材育成のためにどのような研修をされているかというご質問です。よろしくお願いします。

（小林）

トヨタを離れてもう10年以上になりますので、現実はあまり実態をよく知りませんが、先ほど説明させていただいたように、仕事の７割が海外にございますから、いわゆるグローバルというのを教えるのではなくて、日常の実務の中で、出張、テレビ会議、それからメール等々、それから海外のトヨタの方がトヨタ本社で一緒に仕事をしているので、グローバルの仕事は当たり前になっていますので、日常の活動の中で覚えていただくというか、体得してもらうというのが１つです。

それから、私の時代は海外生産は海外何とか部がやっておりました。そのうちに、90年代になる

とグローバル何とか企画部といって、それは調達も開発も、いろいろなところでそういうグローバルという名前になりました。今は完全にもうグローバルも消えて、すべての部署が海外をやる、全員で海外をやるという体制になっています。それが当たり前になっています。

３～４年前にトヨタの人事の方が来て、少しお話をさせてもらったときに、今は大卒の新入社員は、入社３年以内にすべて全員が１年以上海外のトレーニングというか、海外へ出掛けていってインターンという言い方が合っているか知りませんが、実働研修をするというのが当たり前といいますか、そういうことでしつけています。特に英語圏でないところに積極的に出している、新興国、途上国です。

かつて私の時代に少数言語国、スペイン語圏、ポルトガル語、トルコ語、アフリカなど、そういう形で、若手の30歳前後の方を２年間海外に出しました。それは、１年間は向こうの大学で勉強させ、１年は現地にあるトヨタの拠点で実務研修をする。仕事をするというよりも、体で覚えてこい、現地に同化しろというプログラムをやっていました。そのときに、やはり少数言語を勉強すると、後でなかなか応用が利かなくなってしまう、ずっとトルコ語の世界、インドネシア語の世界では大変だということになりました。今はもう、私の説明にありましたけれども、トヨタに入ってこられる方は英語のレベルが相当高いので、もう英語の教育はしていません。当然課長になるためには、TOEICで何点以上でないとなれないという状態になっております。ですから、基本的な能力のところは自分でやる。あるいは全員でやるという仕組みです。実務を通じて人材を育成しているというのが今のトヨタのやり方となっています。

（藤田）

入社後のお話は分かったのですが、採用のときにどういう資質…。

（小林）

採用の際には特別なことはやっていないと思われます。

今申し上げたように、全員が海外の仕事も国内も同じでやりますので、専門家は必要ではございません。それが今のトヨタです。

（藤田）

ありがとうございます。

（鈴木）

続いて、池田先生と西嶋先生にご質問いたします。池田先生には多くの質問が来ていますが、一番多いのは、導入時期がいつかということです。そこからお願いします。

（池田）

ありがとうございます。導入時期ですが、新テストと同時を目指しておりまして、平成33年度入試の後期の一部で導入を目指して検討しているところです。

（鈴木）

それはAOとの関係はどうでしょうか。

（池田）

AO入試との関係ですね。AO入試と後期を含めて検討しているような状況になっております。

（鈴木）

次に、TGPに採用される検定資格の種類は、現在明らかになっているというのでご回答願います。例えばTOEFL、TOEIC、英検などとありますけれども、ご検討されている。

（池田）

現時点で決まっているものはありません。今現在は、本学の入学者の調査書に記載されているさまざまな資格等を分析して、どういったものであれば高等学校の先生方が調査書に入れてくれるの

か、どういったものを見てほしいのかということの検討をしているところです。

（鈴木）

同じ仕事をしている者として１つだけ加えますと、例えば北大の合格者の2,500人分の調査書を全部分析して、どんな調査書で何を見ているかというのを事細かく分析している状況です。もう１つ池田先生にご質問します。一般入試の前期日程の入試問題の内容も、北大入学後、より伸びる生徒、北大がより欲しい人物を選抜するために、何か変えていこうという動きは学内にあるのでしょうかという質問です。

（池田）

まだコンピテンシーの策定が始まって、ご説明した通り、ドメインの一部についてブレークダウンがされているところですので、試験問題自体をどうするかという議論はまだなってはいないのですが、当然のことながら試験問題、前期であれ、改善、改革にこの北大版コンピテンシーを使っていきたいとは考えております。

（鈴木）

続いて西嶋先生。センター試験が導入され、今後もCBTによる選抜は不可避だと思います。本日の道新にも取り上げていましたが、英語の試験がTOEICや英検で代用されるのであれば、地方の受験生にも機会均等の環境を与えてもらいたいと思います。インターネットの時代だからこそ、地方や田舎でも受験が可能であるし、インターネットの特性も生かせるものと思われます。現状では遠隔地の大都市まで行って試験を受けなければならないため、これは道内の遠隔地でおそらく職を持たれている先生のコメントですけれども、センター試験にCBTを入れることに対して、先生の何か思いや、ご感想でも構いませんので、一言いただければ。

（西嶋）

先ほど本当に恥ずかしいWordでご発表しました。僕自身が、学校にいるときはあまりインターネット等に不便を感じないというか、専門家がいて設定してくれたものを使うので、特別不便を感じてはいませんでしたが、いざ自分ですべてやるとなると、発注をしたり、いろいろな説明を受けたりで、結局自分のパソコンの環境が、４月から始めて、先週ようやく全部整いました。

ですから、例えば、僕はすごく疎い人間なのだけれども、きちんとコンピューターが分かる人間がそばにいる。僕の場合には近くにお店があったので、お店でやってもらえるのですが、これが、今の時代はインターネットがあるからどこでも平等に、いつでもリアルタイムでできるといいながら、実はその高校にパソコンに詳しい人がいるかいないかによって、ずいぶん環境は変わってきてしまうと思います。

今日あたりの道新か朝日に、いわゆる英検や何かの会場、それからTOEICについてはどこというふうにして、何百キロ離れないと会場がないという話がありましたが、CBTによる試験は、確かに道立学校がきちんと同じようにコンピューターが入っているとはいいながらも、専門家がいない学校は管理にも苦労しているという現状があると思います。

教頭時代も、コンピューターに関して何か起きるのは一番怖いというか、教頭として手も足も出ないような状況がありました。ですから専門家の育成が必要ですし、地方の場合に、決して環境は楽ではないということを意識してやっていかなくてはいけないと思っています。少し重いデータが入ると、学校全体のパソコンが止まるなどという現象もよく見てきていますので、そこら辺のことを考えていかないと、言われているほどには楽ではないという感想を持っています。

（藤田）

それでは、また大塚先生の方に戻ります。入試センターに関して、記述式の問題の導入が特徴に

なっているかと思いますが、その記述式の問題に関しては、現行の２次試験で十分ではないか。わざわざ１次で記述させる必要はないのではないか。これが１つ。もう１つは、英語の民間外部試験利用に関して、経済状況で有利不利が出る心配はないかという、この２点です。

（大塚）

この点もおっしゃる通りだと思います。個別試験の記述式に関して、文科省から出された資料がありまして、国語、小論文、総合問題で記述式をやっている受験生は４割しかいないということが強調されていました。だから記述式は、個別試験でも経験しない人がそれだけいるのだから、共通テストで記述式をやるべきという論理が一時文科省から伝えられておりました。

この点に関しては、私の知る限り、東北大の倉元さん、宮本さんなどのグループがしっかり調べてくれております。文科省の資料では、国語、小論文、総合問題に限定されておりますが、数学を個別試験で課している大学はほとんど数学を記述式でやっています。ところが､理系のほとんどは、センター試験の国語に任せてか、個別試験では国語は課していません。ですから、４割しか記述式をやっていないというのは、逆に、６割は理系等の受験生ということが推察されます。そういうデータをバックに共通試験にも記述式を入れるべしという飛躍する議論がまかり通っていたりもしていますので、我々自身が、提供されている資料や答申などについては批判的に読み解いていかないといけないと思っているところです。

そういう意味で、共通テストと個別試験のそれぞれの役割分担というのをしっかり見極めていくということが大事だと思っております。記述式の採点というのは経験した人であれば、それを50万人に行うことはとてもできないということは経験的によくわかっていることだろうと思います。採点をしているうちに、想定外のこれも正答とし得るという解答に遭遇したりといったこともしばしばあります。それは、数学など、解が一意に定めやすい教科などでも出てくることです。そんな解答が出てくるとまた最初に戻って採点し直さなければいけなくなることも稀ではありません。そういった、相当に大変な作業が個別試験の採点現場では毎年行われていることだと思います。

しかし、だからと言って、記述式を試験からなくせということでは決してありませんし、私自身はもちろん授業では記述式の試験をしてきております。ですから、そういった行きつ戻りつの採点作業であっても、それをこなせる量というものを的確に把握することが肝要ということを強調したいということです。記述式問題のよさを確保できる範囲でやっていくことが私は大事だと思っていますので、共通テストと個別試験の役割分担ということをもっと意識していかなければいけないと思っています。

最近、池田先生のお話しのなかでも紹介されていました「国際バカロレア（IB)」ということをよく耳にするようになってきました。IBというのは、アクティブラーニング的な学習経験を積み重ねる総合的な教育プログラムと聞いています。そのプログラムを修了した生徒は、世界統一の卒業試験を受けて、一定の基準をクリアすれば、国際バカロレア機構から大学進学のための修了資格が授与されるそうです。私自身はその試験についてよく知っているわけではありませんが、その最終試験も記述式が基本となっているそうで、ときどきその問題が評判になったりもします。ただ、私はその試験そのものよりも、その修了証を大学入試に活用する際の拠り所として、IBのプログラムを経ているという積み重ねの結果として修了証が出ているということをあげることができると思います。それだけ長い時間をかけて見ている結果として修了証が位置づけられるということでありまして、これは例えば、アドバンストプレイスメントなども同様の部分もありますし、いわゆる「育成型入試」と呼ばれる入試の一つのポイントになり得ることかと思います。短い試験時間のなかだけで得られる情報に基づくのと、一定の時間をかけてその総体として出される情報との信頼度

の違いということであって、もちろん、それはそれで経験の質がどうかなど、いろいろな課題は潜んでいると思いますが、一定の時間がかけられて得られた情報は安心して参照できるということもあるということです。

現行の入試のように１～２日の短時日で実施する試験の範囲の中でどういう情報が得られるか、そういった短い時間で何かを問うてもせいぜい１問ぐらいしか入れられないということになると非常に信頼度も揺らいできます。どういう範囲の中で何を見るのかということをしっかり考えていかなければいけないだろうと思います。

それから、英語の民間試験についてですが、先ほどCBTの件でも出されていましたが、地域格差ということは大きな問題として、検討すべきことであろうと思います。民間試験活用に関してももちろんそういう課題があるということは既に議論のなかで出てきていることでありまして、北海道も広いですから、そういった問題はいろいろなところであるのでしょうし、先日は長崎大学の先生が同様に離島の問題に言及されておられました。そういう受験生にとっては、２回受験というときに相当な旅費を払って行かなければいけないということもあります。それから、私が秋田に行って講演したとき、高校の英語の先生から聞いた話では、数千円の受験料も出すのが苦しい家庭が秋田にはたくさんあるということでした。センター試験に加えて、受験料を余計に課すということは絶対にやめてほしいという訴えを聞いたこともあります。ですから、地域格差とか経済格差とか、そういった格差の問題で公平性が揺らいでしまう部分をこれからどう埋めていったらいいのかということは、私は存外大きな課題になるだろうと思っております。

（藤田）

ありがとうございます。引き続いてまた小林様の方にですが、ご講演の中でいろいろなキーワードがありました。１つグローバル化と弱肉強食ということで、グローバルの世界では弱肉強食であるという話がありました。一方で共生という部分との兼ね合いというのはどうでしょうか、というご質問がありました。

（小林）

一般論で弱肉強食、強い者が勝つということは申し上げましたが、皆さんもご承知のようにダーウィンの進化論は決して強い者が生き残るのではなくて、変化に対応できるものが生き残るという意味で、強さというのもそこは柔軟に考えていかなければいけないのかなと思います。

自動車業界で言うと、私が入社したときにはビッグ３というのは超強大でしたが、現在はその力がかなり衰えています。日本でも決して大きくない会社が世界的にブランドを確立して頑張っておられます。それから、かつて頑張っておられた家電メーカーは有名な会社が軒並みがたがたになってきているのは何なのでしょうかという意味で、そこに対しての強さというのをどうやって維持するか。変化に対応していく、あるいは、人材育成、将来に備えたいろいろな企業戦略をやっていく。そういうことが僕は大事だと思います。

基本的には共生という状態の中でまず考えなければいけないのは、自分たちの強み、弱み。全方位的に強いというのが理想ですが、１点の強みがある方、ある会社というのはそれが強みになってきます。だから、そこのところをどう考えていくかというのは決して単純ではありませんが、世の中は変化しています。その変化を先取りしながら準備をしていく。それは一人一人がそういう力を持つといいますか、社長が考える、あるいは、役員が考えるのではなくて、一人一人がアンテナを持って考えていく。私が言っている自立、あるいは、共生していく、個としての強さ、やるべきことをやるべきときにやるべき人がやりきるという、その文化をつくることが大事ではないかと思います。

ご承知のように日本は長寿企業が世界で一番多いです。100年以上続いている会社が１万社以上あります。こんな国は世界にはありません。それ

はなぜかというと、そういう風土、経営理念、あるいは、従業員の教育、そういうものをやってきた結果ではないでしょうか。そういう文化を日本人は持っているのではないかということで、そこのところの自分の強みを十分理解していくと我々日本人というのはかなり優秀な集団と思われます。

それを自覚して世界で戦えるという自信を持って、着実に、だけど、怠けずにやり続けるということを私はお願いしたいです。私の言葉で言うと自転車操業です。こぐのをやめたら倒れます。アメリカやフランスやオーストラリアのような豊かな国はヨットに乗っているようなもので、セールを引っ張っていればぴゅーっと走っていきます。日本は常に自転車をこいでいないと。私は団塊の世代で自転車をこいで70歳になりましたが、若い方も一緒に自転車をこいでほしいと思っています。

（藤田）

個が自分でこいで動いていく、そういう力、それの集合体。

（小林）

そうです。

（藤田）

ありがとうございます。

（鈴木）

今の話に少しリンクすることですが､池田先生。北大コンピテンシー入試の評価項目（TGP）について、実績自体に客観的要素がある場合、具体的にはTOEFLのスコア、部活動の大会成績はいいですが、結果として出せなかった非常に価値があるもの、例えば、生徒会や学校祭での頑張り、このようなものはどのように評価するのでしょうかというご質問が来ています。

（池田）

非常に難しいとは思います。高等学校で行われている活動はかなり多岐にわたっていると思いますし、それを個別にすべてを我々が把握して配分を決めてというのは相当難しいとは思います。ただ、我々が勝手に配分を決めるつもりはありません。今、調査書の方の分析を行っているように、高等学校との連携を図りながら、それに対しては個別に検討していくような仕組みをつくっていきたいと思っています。

（鈴木）

一緒に仕事をしている者として、１つ付け加えます。今、北大は北大単独の入試改革を５年間で進めていますが、これ以外に国から委託研究というのを受けています。最近、共通テストが話題になっていますが、国語の入試問題はどのような資質を測定しているのかというのを国から委託を受けて研究をしています。その別のチームに主体性を測定するグループがありまして、そこが調査書の検討に入っています。新しいスタイルの調査書はどういうものかという検討をしているようです。

そことこのあたりはリンクすることになりますので、２年ぐらいすると次の調査書はどのようなものかというイメージは出てくるのかもしれません。それはぽしゃるかもしれませんが、委託研究はされています。ご質問にあったように、新調査書の独立性はすべて高校教諭の負担となるのではないかというご心配もあるようですが、私が小耳に挟んだところではかなり変わるのではないかと。特に７番です。第７項目が少し手が入るのではないかと聞いています。

それから、ついでに現場を経験の西嶋先生。西嶋先生が考える理想的な調査書といいますか。いきなり振って申し訳ないのですが、例えば、今までの調査書というのは高校の記録でした。そんな調査書があると多様な資質能力を測定するこれからの入試改革の方向にフィットするのではないか。いきなり振ってたぶんお答えに窮していると思われますが､何かアイデアがあれば｡どうでしょう？

（西嶋）

高校の先生方がたくさんおられるので、調査書はどういうふうに作られているかというのはよくご存じだと思います。指導要録を基本的に転記するのが原則ですが、クラス担任による差は、学校によっては個人差がかなり認められる世界なので、推薦入試があった時代には推進入試のためにわざわざ詳しく書いたりしたこともあります。

ですから、これからは文科がいろいろな改定をやっていくという話の中で、１つのモデルケースが出ればできるかなというのはありますが､正直､調査書で差を付けられるとなったときのどういうふうに現場が対応するかというのはすごく難しい問題だと思います。小さな学校であれば１つの観点でやれると思いますが、８クラス、７クラスある学校が同じ観点ですべての人間の調査書を作るというのはすごい作業になると思います。

（鈴木）

ありがとうございます。これも池田先生でしょうか。北大の入試が変わることは理解できた。これは他大学、特に旧帝大も同じような動きをしていくのだろうか。高校入学時に北大に行きたい生徒が最後までそのままならよいが、途中で入学希望大学が変わる生徒に対してうまく対応できるものなのか心配ですと。いかがでしょうか。

（池田）

非常に難しい問題で、おそらく足並みをそろえないと、北大を希望して、北大であればさまざまな活動を評価してもらえる。でも、ほかの大学では評価してもらえないということになると不公平ではないとは思いますが、進路選択の自由度が失われることになると思います。

ただ、本学としては、北大のコンピテンシーはそもそもが17年前に鈴木さんと一緒に考えて理想としてきたことの実現の第一歩ではありますが、現在、文科省および国大協の方からこのような多面的な能力を見るような試験を定員枠の約２割までを目指してやるようにと来ています。なので、ゆくゆくは本学だけではなくて、他大学、旧帝大を中心にしてこのような入試の検討がどんどん進んでいくのではないかと思います。その先鞭を切るという意味で北大が先にやっているのではないかと思っています。

（鈴木）

もう１つ質問が来ています。この入試改革は高校教育のエンパワーをどのように考えるのか。北大にとっての利益はよく分かるのだが。ここに対して。

（池田）

内容を見ていただくと分かるように、私の話の中で最初に申し上げましたように、今、高等学校での教育指導というものをはたから見ていると言ったら失礼ですが、感じでは文科省等から来ているさまざまな活動、取り組みに取り組みつつ、一方では全然変わっていない入試に対応しなければいけないということで、高校の中でもかなり分裂しているところがあるように見受けられます。

本学の入試、TGPということでそれらをすべて包括的に見ることができるという意味では、高等学校が行っていることをそのまま受け入れて評価できるような仕組みしたいと考えています。そういった意味では決して高等学校の教育に負担になるような入試というものは考えていませんし、むしろ、ｅラーニングやコンピテンシーということで対策しても、きちんと社会に通用できるような能力を身に付けてほしいというメッセージにはなっていると思いますので、そのあたりをご理解いただければと思います。

（藤田）

それでは、大塚先生、もう１つ質問が来ております。ちょっと具体的な話になりますが、平均点が60点前後という話がありました。高校の勉強をまじめにしていれば、６割というのはおかしいのではないか。もっとできる問題でなければいけないのではないかというご質問です。

（大塚）

平均点はもっと高くあるべきだということですか。

（藤田）

平均的に学んだ学生ができない問題が４割以上あるという、そういう問題でいいのでしょうかという質問です。

（大塚）

それはそうですね。平均点60点ということは正規分布を仮定すれば、60点より低い受験生が半分いるということですから。センター試験は相当難しいと今の私は思います。とてもじゃないけれども６割いくかいかないかという感じです。これは問題作成を担当されている先生方も私には満点は無理だという話をよくされています。分量も多いですし、例えば、国語の問題大問が４問で、現代文２つと古文、漢文がありますが、80分で受験生はよくこなせると感心します。ちゃんと満点をとる受験生もいます。ですから、そういう意味では受験生はすごいですが、それにしても、平均点６割というのをどうとらえるかという問題は確かにあると思います。

私が今日お話しできなかったスライドの中に、受験生が多様化しているということを示す資料を含めておきましたが、その点が１つのポイントになるだろうと思います。多様化するということは、いわゆる「ボリュームゾーン」という言葉でよくいわれている受験生が増えてきているということでありまして、そのレベルの受験生にとっては相当厳しい問題になっている可能性があります。そういう受験生にとっては、センター試験は勉強してもできそうもないという、「自己効力感（self-efficacy）」という心理学の言葉がありますが、それが失われてしまうと余計に勉強しなくなっていくということもあります。その点で、私はまずセンター試験のレベルをいくつかに割っていかなければいけないのではないかと思っています。それぞれの層に応じた適切な試験問題の難易度があるのだろうと思います。ただ、いくつかの難易度に分けると、それだけで大学の序列化につながるという批判も来ますので、こちらを立てればあちらが立たずというのが入試の難しさではあると思っています。

もう一点、現行では、AO入試でも推薦入試などでも12月までに合否が決まりますから、合格が決まった受験生は実はセンター試験を受けなくてもいいわけです。でも、高校の指導で１万8,000円の受験料を払っているのだから、センター試験を高校での勉強の集大成として受けてくるようにという指導が多く行われているようで、だいたい十数万人、２割を超える受験生はセンター試験を受験しながら、その成績を大学に提出していません。そういう受験生の平均点は当然全体として低いレベルになるわけで、ほぼ1/4に近いセンター試験成績のみ利用者のいるなかで、平均点をどう見るかというのは悩ましい問題となってきているということを付け加えておきたいと思います。その辺は新テストにおいてどうするか、ぜひ検討を深めていくべき課題であると思っているところです。

（藤田）

ありがとうございます。小林さんに私の方から１つ。昔の方はという言い方もおかしいですが、日本の産業をリードして世界に出ていって、日本の繁栄を築いてきた。そういう意味での力強いコンピテンシーというのがあったと思います。それが今の時代に本当はあるけれども出していないだけなのか、あるいは、受験制度とかそういうことと絡んでそういう力が少し落ちてきている。そういうことはあるでしょうか。ちょっと難しい質問かもしれませんが。

（小林）

難しいですね。一般論として言うのは難しいし、私も最近の体験というのは限られた範囲でございますが。今、北大の新渡戸カレッジでフェローをさせてもらっていて感じるのは、今の学生さんは

優秀だな、頭いいなと。それから、帰国子女は海外体験を相当していて、あるいは、教育ツールのよさもありまして、英語力はすごいです。それから、新渡戸では１学年200人ぐらい勉強してもらっていますが、２～３割の方は相当なレベルです。もちろんレベルのばらつきはありますが、すごいなという人たちが現実的にいらっしゃいます。

ですから、ここからここまであるという幅広さ、いろいろな人たちがいるという中で伸びる人を伸ばしていくことが僕は大事ではないかと思います。平均点を上げるのではなくて、伸びる人は伸びてもらう。伸びない人は放っておくというのはチャンスは与えますけれどもという意味です。そういうところで私の気付き、やる気、モチベーションというのを高校、大学でその本人が持っている資質を刺激してあげたら、伸びる人は伸びるなと今、感じています。

（藤田）

ありがとうございます。そうすると環境要因というか、学生に刺激を与えるような周りの雰囲気とか、そういうことですか。

（小林）

教えて伸ばすのではなくて、チャンスを与えて伸びてもらうということです。そこに学生さんの主体性を刺激してあげるということです。あなたはできますよというふうにポジティブに言ってあげる方が。特に欧米ですと褒めて人を伸ばすという文化ですが、日本は反対なところが若干あります。

（藤田）

ありがとうございます。私も小林様に質問があります。主体性というのはすごく大事なことですが、トヨタ自動車が考える物を生み出す力、独創性、創造性というのはどういうふうに考えていらっしゃるんでしょうか。どのようにすれば、独創性、創造性が発揮できるのか。そこには何が必要か。社員にどういうものを求めているのか。

（小林）

どこの会社も僕は同じだと思いますが、ある資質がある人たちにチャンスを与えてあげる。教えるのではなくて、チャンスを与えて失敗をさせる。失敗をさせてもまたそれを。私も海外の仕事の時代に先生がいなくて、大した能力がない人がやっているものですから、しょっちゅう失敗していました。これをやったらしかられるなと思ったら、逆に、小林君、元気だな、どんどんやれみたいなことを言ってくれたのがエネルギーになったという体験をしています。

チャンスを与えてあげる、あるいは、そういう刺激をしてあげる。人間というのは、あるいは、日本人というのはあるレベル以上の能力を皆さん持っています。別に大学を出たから、東大を出たからという部分ではない部分があります。トヨタ自動車においては学閥も何もなく、出世される方は結果を出している人です。学歴はほとんど関係ない、チャンスはみんな均等だという状況をつくってあげる。そうしたら、頑張れるのではないか。それから、企業が持つ風土を教え込む人づくりというものを意識してやっていく。そういう環境をどこの場でもつくるべきではないかと思います。

（鈴木）

ありがとうございます。時間が来てしまいました。たくさんの質問がありました。例えば、ウェブ利用にはウェブ環境の保障が必要になるのではないか、あるいは、データストレージが重要ではないかなど、さまざまな質問をもらいました。あとは終わった後に個人的に質問していただきたいと思います。

今日のテーマは「高校・大学・社会をつなぐ大学入試を目指して」というテーマです。そこで統括された池田を除く３名の皆さんに北大の入試改革に望むことをお１人ずつお話しいただいて終了したいと思います。それではよろしくお願いします。

（大塚）

ほかの大学ではどうなのかということが先ほど出ておりましたが、小林さんの言葉を借りれば、和魂洋才といいますか、アイデンティティーといいますか、北大の独自性を強調していただくのがまず第一かなと思います。入試についてもそれぞれの大学でいろいろな工夫がなされてきていますが、ある種の人体実験的な部分があって、何でもかんでもできるかというとそうもいかないわけです。特に、共通試験というのはいろいろと試せない部分が非常にあって、そういう足かせがあります。ですから、私は、北大はそのアイデンティティーを強調していってもらって、ほかの大学がどうあろうと北大らしさを追求していってほしいと思います。

コンピテンシーテストという考え方は、今の入試改革の中でもその視点が取り上げられています。コンピテンシーの定義自体にも多様性はありますので、必ずしも同一の枠組みでくくれない部分もあるとは思いますが、入試センターでも法科大学院入試などでは、むしろコンピテンシーに関わる総合的な試験で、言語運用力、数理分析力といった能力測定のための試験が開発され、実施されていた経験もあります。ただ、そのような試験が導入されたことには背景があって、法科大学院などの場合はいろいろな学部から受験生が来るので、高校のように学習指導要領に基づいた教科的な試験はできないということがあって、コンピテンシーをベースにした試験を開発するということになったわけでして、試験というのもそういった背景に依存する部分があります。ですから、すべての大学に同じような試験にしていくということは、私はそう簡単なことではないだろうと思っています。

それから、コンピテンスという言葉は自分の内から主体的に学習に取り組むというモチベーション的なニュアンスを含んだ能力概念だと認識しております。モチベーションは教育においては非常に重要ですが、入試という一般的な場でそのモチベーションをどう測定するかというのことは難しい話です。何故かと言いますと、モチベーションというのは領域固有（domain specificity）といいますか、文脈依存（context dependency）といいますか、基本的にそういう性格を持ったものです。つまり、自分はここはモチベーションを持てるけれども、こっちは関心がないんだということがあるわけでして、関心のないところでこの人はモチベーションがないと言って切り捨てられてしまうのがいいのかどうなのかということがあります。ですから、モチベーションを出せるような、小林さんの言葉を借りれば、チャンス、何かその個人に合ったチャンスが与えられるということが大事なことであって、一括して入試の中で測定できるかどうかということは慎重に検討されるべきことだろうと思います。

私のスライドの一番最後に、「いちばん大切なことは評価してはならない」という言葉を記しておきました。一番大切なことは大事にしなければいけません。小林さんのお話の中に取り上げられていたことは私も共感いたしましたが、それを見るときにどう測定したらいいのか。それを試験の中で評価することが本当にいいことなのかどうかということはまた別の話であると思います。「育てる力」と「測定すべき力」、「評価すべき力」は、しっかりと峻別して選抜を考えていく必要があると思います。

そういう意味でも、北大の入試の中でコンピテンシーテストなどがどんな形で実現していくのか、また、TGPがどんな形でまとまっていくのか、興味深く見守っていきたいと思います。それを追求していくということは、北大の文脈の中でチャレンジしていくということが私は一番いいことだと思います。それに加えて、入試の研究にも関わる一人として、特に包括的追跡調査をやられるということは非常に頼もしく思います。そういった入試研究と合わせて、北大ならではの入試を作り出していっていただければと思います。

（小林）

私は今日しゃべらせていただいていますよう

に、人間力のある人をつくってほしいです。北大の４つの建学の精神を柱として、ほかの言葉で言うと心技体。技はいいのですが、心と体。それから、もう１つ私がリーダーシップで勉強した中でアメリカの陸軍士官学校の指導マニュアルを勉強して、これはすごいなと思いました。

そこにはBe、Know、Do。リーダーとして大事なのはBeという人間力、人間性です。それから、Knowというのは頭脳といいますか、戦略、企画力です。それから、Doというのは実行力です。言うのは簡単ですが、実際に測るのは極めて難しいです。もうちょっと簡単に言いますと、一芸に秀でた人、あるいは、出るくい、そういう人。きれいなチレーダーチャートを描いたら、80点で丸になっている人よりもどこかとんがっているとか一流とか、そういう人を北大はつくってほしいと思います。そういう力のある人。頭のいい人というよりも心技体。心、それから、体というのを大事にして、そういうバランスのある人間を、人間力のある人を育てて欲しいと思います。よろしくお願いします。

（西嶋）

大塚先生が話された入試改革も含めて、高大接続改革というのはものすごい理想論の中にあって、こんなことができたらすごいなと言いながら、現実に我々は現場を知っているから、これはできないんじゃないか、できないんじゃないか、記述式の改定なんかできないんじゃないかとすぐそうやって考えてしまいます。

ただ、そういうふうに考えながら、大学のあるべき姿とか高校のあるべき姿を考える１つの原点に立ち返らせるようなものはあったと思います。北大の批判になってしまうかもしれませんが、20年以上前に北大が学部別入試の入試科目を決めたときにちょうど説明会に参加していて、文学部が２次科目に英語と国語に加えて、もう１教科を数学と世界史、日本史、地理、そして、倫理だという話がありました。何で倫理が入って政経が入らないのかという質問をしたときに、北大の先生が倫理は文学部でつくれるけれども、政経はつくれないからという回答がありました。そうか、入試科目というのは結構大学の都合で決まるんだなという、そういう思いをしたことがあります。

大学の都合とか何とかと言う前に高校生に求める学力は何だというのを今回の入試改革の中で打ち出しています。前の改革のときも結局、総合選抜をやったときに理系は1,000人総合で取って、文系は100人取るという非常に不思議なことが起きたりして、それで学部の意思というのがある程度見えてしまいます。大学の対応ではいいと思いますが、ただ、入試に関してはぜひ大学が１つになって、うちはこうなんだということを目指してほしいです。

今回の入試についても、学部別の募集人員と出てきたときにあまりにも差が付くようだと、「何、これ？」という感じになってしまうと思います。是非、入試の理想に向かって改革を進めていただければ、高校はあまりじたばたせずに我々はどんな生徒を育てたいんだということをもう１回考える原点に戻ってもいいのではないかという、そんな気がしてずっと今回の入試改革を見ています。

（藤田）

どうもありがとうございます。時間が８分ほど超過しております。大変申し訳ございません。これで第３部のパネルディスカッションを終わりにしたいと思います。なお、このフォーラムは来年以降も続けたいと思いますので、またお集まりいただければ幸いです。

（司会）

パネリストの先生方、それから、コーディネーターのお二方、どうもありがとうございました。（拍手）